

ピュロンとインド思想

嘉 吉 純 夫

はじめに

エリス出身のピュロン(前三六〇頃—二七〇頃)は、一般に古代懷疑主義哲学(pyrrhonism)の祖とされているが、古代末の哲学史家ディオゲネス・ラエルティオス(以下DLと略記)によれば、彼は、その師であったアナクサルコスに随従してアレクサンドロス(アレキサンダー大王)のインド遠征隊に加わり、インドの「裸の哲学者たち(gymnosophistai)」と出会って決定的な影響を受け、その結果「きわめて高尚な仕方では哲学するようになった」と言われている(DL, 6)。従来この報告は無視或いは軽視されがちであったが、しかし彼の思想の特異性に注目するならば、やはり資料の許す限りこの伝承を追跡調査し、さらにそれを比較思想的観点から検討してみるべきであらう。筆者は第十七回大会においてこの作

業を行なったが、この小論はその概要を報告するために選ばれたものである*。

一

さて、ピュロンの哲学的原点を考究するにあたっては、まず彼の根本思想がいかなるものであったのか確認しておかねばならない。ピュロン自身は著作を残さなかったが、しかしアリストクレスを介してエウセビオスの『福音の準備』に保存されている一節(ピュロンの直弟子ティモンの著作『ピュトン』からの要約引用と推定される)は、以下のようにピュロンの哲学を概括している。

ところで、ティモンの語るところでは、彼(ピュロン)は次のように言明しているという。すなわち、「諸事物(συνεχόμενα)は等しく無差別なもの(adiaphora)であり、不確

定なもの (astathmetia) であり、いであると判定しえないもの (anepikrita) であって、それ故我々の感覚や判断は、いずれも真を告げもしなければ偽を告げもしない。従って、この故にそれら (感覚や判断) に信を置くことなく、むしろ一つ一つのものについて、『であらぬよりもであるわけではない』とか、『でもあるし〜でないのもある』とか、『〜でもないし〜でないのもない』とか言って (別訳——『〜であるのも、〜であらぬのも、〜でありかつ〜であらぬのも、〜でもなければ、〜でないのもないのも、いずれでもない』と言って)、一切判断を下さず、いずれにも傾くことなく、揺れ動かずにいなければならぬ」と。しかるに、実にこのような態度をとる人々には、ティモンの語るところによれば、まず無主張 (定言の回避) が、次いで平静な悟脱の心境 (apatheia) が、結果として生じることになるだろうというのである (Eusebius, *Preparatio evangelica* 14, 18)。

E・ツェラー以来、ここに要約的に記されているピュロンの根本思想は、専ら認識論的な観点から解釈されてきた。この伝統に従えば、ピュロンの言う事物の無差別性、不確定性、判定不能性は、我々人間の認識能力が不完全であることに由来すると解される (cf. A. A. Long, *Hellenistic Philosophy* (Berkeley-Los Angeles, 1986), pp. 80-81)。或いは、我々自身の認識や判断の真偽を検証するための絶対的な基準を、我々が有していないことに起因すると

解される (cf. C. L. Stough, *Greek Skepticism* (Berkeley-Los Angeles, 1969), p. 19-20)。すなわち、ピュロンの思想的原点は、認識論上の懐疑論ないしは不可知論にあると見做されるのである。

しかしながら、ピュロンの言明をもう一度虚心坦懐に読むならば、このような解釈には重大な欠陥があることが了解される。何故ならば、案に相違して、原文においては、感覚や判断に対する不信から事物の判定不能性が導出されてはおらず、むしろ反対に、事物の無差別性、不確定性を根拠にして感覚や判断に対する不信が表明されているからである。金山弥平氏は、そのすぐれた論考 (『ピュロンにおける事物の無差別性』『西洋古典学研究』三七) において、この点に加えてさらにいくつかの難点を指摘しているが、いずれにしても、純認識論的な懐疑だけからは、「どうしてよいかわからない」という不安定な精神状態が生まれることはあっても、原文から感得されるような強い確信——「無判断を貫いて無動揺のままに生きるべきである」という信念——が生じることはないように思われる。実際、捏造や誇張が数多く含まれているとは言え、ピュロンの実生活に関するDLの報告には、そのような確信や信念の存在を示唆する多くの逸話が含まれているのである (DL, 61-62)。

この点で、A・A・ロングとD・N・セドレイによる新解釈は、はるかに説得力があり、傾聴に値する。彼らは、セクストス・エンペイリコスを代表とする後期のピュロン主義者たちの認識論的

懷疑を、そのままピュロン解釈にもち込むことを避け、ピュロンの言う事物の無差別性を顔面通りに受け取って、ピュロンの哲学の根幹に一種の形而上学説——「世界や事物そのものが、本来的に人間の識別や判別を受けつけないような無差別性・不確定性を有する」——が存在すると見做して置く (cf. A. A. Long and D. N. Sedley, *The Hellenistic Philosophers* (Cambridge, 1987) I, p. 16; II, p. 9)。彼らの解釈は原文の論理により忠実であり、前述の難点を一応克服していると思われることができる。とは言え、この解釈にも難点がないわけではなく、再び金山氏の批判を借用するならば、ピュロンは事物の本性的な無差別性を認め肯定することによって、事物の本性に関する判断保留の原則を自ら破るという自己矛盾を犯していることになるのである (前掲論文、五九頁)。

そこで金山氏自身は、原文における「事物 (ta pragmata)」は事実上「事物に関する人々の把握 (各人に現われるところのもの)」のことであると解し、「人々が事物は然々であると考えるのは、いずれも等しく、実際にその通りかどうかという点で他と特に異ならない (adiaphora)」というのがピュロンの主張の真意であると見做している。これは言わば論争超越的解釈とでも言うべき解釈であり、氏に従えば、ピュロンは「幸福達成には事物の本性の把握が必要であるというギリシア哲学の伝統的立場」を離れて、世界のあり方に関する従来の哲学者たちの空しい論争を超越と見下ろしている、ということになる (同、六一—六四頁)。

だが、私見によれば、この卓見にもやはり難点があるように思われる。すなわち、原文中の「事物」を「事物に関する人々の把握」と解するのは何としても不自然であり、またDLの証言——「彼 (ピュロン) は次のように主張していたのである。すなわち、『いかなるものも (本性的に) 美しいのでもなければ醜いものでもない』、正しいのでもなければ不正であるのでもない」と……何故ならば、各々のものは「それであるよりもこれである」ということがないからである (DL 9) ——を考慮に入れるならば、ピュロンの言明は、やはり事物そのものの本性や区別をめぐめるものであると解すべきであるように思われるのである。

以上、ピュロンの根本思想とそれに対するいくつかの代表的な解釈を瞥見したが、これらの解釈は互いに相容れず、またそれぞれ一長一短があつて、いずれをとるべきか判然としない。筆者自身は、以上のいずれとも異なる解釈をとるべきであると考えが、それは、前掲の諸解釈がほとんど無視しているピュロンの「インド体験」を重視するからに他ならない。

二

ピュロンが師アnakサルコスとともに参加したと伝えられるアレクサンドロスのインド遠征隊と、インドの「裸の哲学者たち」との接触の実態に関する記録は、プルタルコス、アリアノス、ディオドロス、ストラボン等の史家たちの書物に保存されているが、

紙数の制約上ここでそのすべてを検討することはできない。また、それら史料には、アナクサルコスの名は散見されるが、ピュロンその人の名は見当たらない。もっとも、当時彼の哲学的キャリアがまだ浅かったこと、また彼がアレクサンドロスの随行者たるア・ナクサルコスの同伴者という立場であったこと等を勘案するならば、そのこと自体は別段不思議ではないように思われる。いずれにしても、我々としては、少なくとも史料が伝えるところの要点だけは把握・確認しておかねばならない。

まず有名なブルタルコスは、インドの裸の行者たちがアレクサンドロス（以下Aと略記）に激しく抵抗し、それに対してAがかなり敵しい態度で臨んだことを伝えており（*Boi Paralleloï, Alex., LIX, 4; LXIV, 1-LXV, 2*）。そこから我々は、彼らとの接触が、A一行にとって相当な重みをもつ出来事であったということを知ることができる。

またアリアノスは、行者たちの或る一団が、A一行に対してただ黙って地面を踏んで見せ、Aの野望の空しさを揶揄して、大王とて死ねば埋葬されてわずかな土地を占有するにすぎなくなることを示した、というエピソードを伝えているが（*Alexandrou Anabasis, VII, 1, 4-6*）。この話はピュロンの思想的原点を考える上で甚だ興味深い。というのは、彼の弟子の一人ピロンが、彼が人間的生の無常と空しさを詠ったホメロスの詩句をこよなく愛していたという事実を伝えているからである（*DL, IX, 67*）。

だが、諸史料が最も比重を置いて伝えているのは、A一行がダンドミスと呼ばれる人物の率いる裸の行者たちの一団と交渉をもったこと、そしてその中からカラノスという名の人物が一行に同行することになり、Aの随行者たちに相当な思想的影響を与えた後に、病を得て、自ら望んで火葬用の薪の上に上り、一行の眼前で焚死したということである。その時の一行の反応について、アリアノスは、「カラノスが火炎の中で、身体のかかる部分をも微動だにさせずにいるのを見てまさに驚嘆したのであった」と伝え（*VII, 9-10*）、またディオドロスは、「居合わせた人々の内のある者たちは、カラノスは気が違ったのだとして彼を非難し、また或る者たちは、苦痛に対する自らの忍耐力を、徒らに誇示しようとする虚栄心のあらわれと見做して非難したのであるが、しかし或る者たちは、そこに剛胆と死の蔑視とを認めて、心底驚嘆の念に打たれたのであった」と伝えている（*Bibliothèque Historique, XVII, 107, 6*）。さらにアリアノスはその後日談にも触れ（*VII, 18, 9*）、また以上の史家たちが資料として用いたと推定されるメガステネスの報告も、やはりダンドミスやカラノスにまつわる同様の情報を記載している（*cf. Strabon, Geographica, XV, 1, 68*）。

そして、以上の報告が大筋において信憑性を有することは、実際にAに随行したキュニコス派の哲学者オネシクリトスの証言によつて保証される。この証言は、ストラボンの『地理書』第十五巻第一章に、三節にわたって要約・引用されており、そこには、

ダンダミスの率いる十五人の集団がタクシラの町の郊外で炎天下苦行に勤しんでいる様子、その後カラノスがA一行に同行して最後に焚死したこと、初対面時における彼らとの会話の内容、またそれに際して、哲学的に無知な通訳を次々と三人介さねばならなかったという困難な状況、さらには彼ら行者たちの脱俗的な生活信条や生活実態、こうしたことがオネシクリトス自身の直接的な見聞に基づいて生き生きと記されている(XV, 1-33-38)。加えて、ストラボンの同書には、Aの部将であつたネアルコスとアリストブロッソスの証言も保存されており、特に後者は、バラモンの行者たちが、Aの眼前で実際に苦行を教示したという興味深い出来事を伝えている(XV, 1, 66)。

さて、以上がピュロンが参加したと伝えられるAのインド遠征隊と、「裸の哲学者たち」との接触に関する記録の概要であるが、彼が一行に随行し、上述のような体験をともにしたとするならば、彼はどのような思想的影響を被ったと見做されるであらうか。

三

まずこの点をめぐる古典的な見解の一つとして、ピュロンの内に仏教的な「阿羅漢」に近い理想を認めるJ・バーネットの見解をあげねばならない。彼は、ピュロンを懐疑家としてより宗教的修行者として捉えるべきであると主張している(*Encyclopaedia of Religions and Ethics*, XI, p. 229)。たしかに「DLの伝えるピュロ

ンの生活態度には求道者のそれに近いものが認められる。が、しかし、苦行にせよ禪定にせよ、ピュロンがインド的な行をとり入れた形跡はないようであるし、また先掲の史料にも仏教徒との接触を示唆する記録は残されていない。従つて、この解釈は文献的な裏付けを欠くと言わざるをえない。

これに対して歴史家G・ウッドコックは、史料を踏まえた上で、ピュロンが行者たちから思想的影響を受け、「ある新しい観念を伴つて」帰郷したと発言しており(『古代インドとギリシア文化』金倉圓照訳、平楽寺書店、一九七二、一八五頁、その点でより説得力がある。しかし彼は内容的に踏み込んだ解釈を示しておらず、またダンダミスやカラノスをジャイナ教徒と見做すという首肯し難い見解に立っている(同、二三及び三二頁)。一糸纏わぬ裸で修行するという点では、たしかにジャイナ教徒こそ「裸の哲学者」という呼称にふさわしいと言いうるが、極端なまでの苦行主義と静寂主義を貫くとされているジャイナ教徒が、少なくとも史料に示されているようなかたちでA一行と係わりをもつとは考え難く、この点でやはり受け入れ難いと言わざるをえない。

筆者の知る限り、思想内容の面で最も充実した考察を行なっているのはE・フリントツフである。彼は数々の卓見を示しているが、彼が最も重視するのは、ピュロンの思想表現の内に認められるところの、「一である、一であらぬ、一でありかつ一であらぬ、一であるのでもなく一であらぬのでもない」という言表の仕方

ある。彼はこれを *quadrienna* と名付け、これがインド懷疑論の祖とされるサンジャヤの *ananta-vikhepa* (鰻の如く捕え難い議論) に見られる論法に酷似していると指摘している (E. Flintot, "Pyrho and India, *Phronesis*, 25 (1980), p. 92; pp. 99-103)。その実例は『沙門果経』に見られるが、ここでは引証する余裕がない。いずれにせよ、この種の論法を用い、断定の回避から心の平静の獲得へと進む点において両者は共通であり、そこでもしこうした面での思想の伝達があったとするならば、ピュロンの根本思想は、金山氏の解釈にあるように、何より論争超越的性格のものとして理解するのが適切であるということになる。但し、サンジャヤの論題には死後の世界や死後の存在に係わるものが多いのに対して、ピュロンの関心は専らこの世の事物のあり方に向けられている。また先掲の諸史料は、サンジャヤの流れを汲む人々との接触については何ら言及していない。とは言え、*quadrienna* は初期の仏典 (例えば小マールンキヤ経) にも散見されるから、ピュロンが当時の行者たちの間で交わされていた議論を通してサンジャヤの思想を知り、間接的に影響を受けたと想定することは決して不可能ではない。

だが、前掲諸史料に基づく限り、ピュロンに最大の影響を与えたのは、バラモンの行者たちとその思想であると見るべきである。『ヴェーダ』では火神アグニに高い地位が与えられ、『ウパニシャッド』には、バラモンが火葬によって死後の世界に赴くべきこと

が説かれている (*Chand. Up.*, V, 9, 2; 10, 2)。それ故、諸史料に記されているカラノスの焚死は、正統バラモンの流儀に従ったものであり、従ってダンダミ一派はバラモンの行者であると見做される。またカラノスは当時七十三歳であったと伝えられているから、この点でも、所謂家長期を終え林住期から遊行期に入ったバラモンであるとするのが妥当であろう。そして、彼らからの思想の伝達があったとするならば、ピュロンの思想的原点に形而上学的見解 (事物の本質的無差別性) の存在を認めるロングとセドレイの解釈が正当化されることになるであろう。実際『ウパニシャッド』には、世界の根源的原理ブラフマン或いはアートマンは、ただ「非ず、非ず」としか言表しえないとする見解が散見される (*Brhad. Up.*, IV, 2, 4; 4, 22; 5, 15)。またそのような本源的世界においては、この世的な区別が一切消失するという思想も認められる (*Brhad. Up.*, IV, 3, 22)。

しかしながら、前述したように、ピュロンの主張の力点は、そのような絶対的世界のあり方ではなく、この世界やこの世の事物の実際上のあり方に置かれている。『ウパニシャッド』の思想的根幹をなすとされる、所謂「梵我一如」の形而上学説を彼が受け入れた形跡はなく、またヤージニヤヴァルキヤによって説かれているような認識論上の卓見 (認識主体それ自体 (アートマン) は認識されえない) も彼の内には認められない。

そこで筆者としては、ピュロンがカラノス他のバラモンの行者

たちから受け取ったのは、何よりもまず、この世的なものに拘泥せず、現世的な区別にとらわれないという精神的態度であつたと考へたい。『ウパニシャッド』には、この世界の事物に関して、識者であることよりもむしろ愚者であることを望み、最終的には聖者であることに聖者であらぬことにもとらわれない、という修行の理念が語られている (Bṛhad. Ua. III, 5.1)。ダンダミス一派の行者たちが果たしてこのような高尚な理念をもっていたかどうか、大いに疑問ではあるが、しかしカラノスがバラモンとして、この世の生老病死に拘泥しない態度を身をもつて示したことは紛れもない事実である。そして、このような「とらわれのなさ」がピュロンに最大の感銘を与えたとするならば、彼の根本思想は、認識論的にも形而上学的にでもなく、むしろ価値論的に（或いは価値超越的に）解すべきであり、彼の言う *adiaphora* も、価値の面での無差別性（この世の事物が価値的にどれも大同小異であり、いずれも定まりがなく、こたわるに値しないこと）を含意していると思われるべきではなからうか。実際、その後ストア学派は、この語を正邪善意の区別のないどうでもよいものという意味合いで用いたのである。

筆者には、ピュロンが、絶えず正邪・善悪・美醜等の区別立てを行ない、それに拘泥するという（従来のギリシアの哲学者たちを含めて）世の人々に遍く認められるところの認識・動や生活態度そのものを空しいと見做す超越的立場に立っているように思わ

れる。そこにこそピュロンの思想的新しさと特異性があり、そしてそれがティモンをして「人間たちの内にあつてただ一人神のように易々と心静かに生を送った」と感嘆せしめ (DL, IX, 68)、エピクロスの執拗なまでの関心を喚起し (DL, IX, 64)、最後にローマ人キケロの批判——「ピュロンは自分の立てた徳に欲求の対象となるものを何一つ残していない」 (De fin. II, 13, 45)——を招いたと見ることができるとはなからうか。また、彼の哲学の論争超越的性格もそこに根差していると見ることができるとはなからうか。いずれにしても、認識能力や判断能力を発揮するのはなく、むしろそうした人間の能力から自由になることによって幸福を得ようとするところに、非ギリシア的な、言い換えればインド的な思想のベクトルが働いているように筆者には思われるのである。

* 筆者によるピュロンの思想的起源に関する全般的考察は、日本大学人文科学研究所刊「研究紀要」第三九号及び第四一号に分載される予定である。本稿では、諸史料や文献の詳細な検討及び注釈は省略させて戴いた。

（かよし・すみお、ギリシア思想、日本大学専任講師）